



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | iPadを活用した英語ポスタープレゼンテーション : ICT 支援英語アクティブラーニングの実践報告                          |
| Author(s)    | 小薬, 哲哉  |
| Citation     | サイバーメディア・フォーラム. 2019, 19, p. 19-24  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/73407">https://doi.org/10.18910/73407</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# iPad を活用した英語ポスタープレゼンテーション —ICT 支援英語アクティブラーニングの実践報告—

小葉 哲哉 (大阪大学 言語文化研究科)

## 1. はじめに

現在担当している共通教育科目英語の受講者数は、学部によって差はあるものの、1 クラスあたりおよそ 40 人から 50 人ほどである。この少なくない人数規模の授業で英語のプレゼンテーションを行うことを考えた時に、解決すべき問題が 2 つある。1 つは、発表の回数の少なさである。全員に満遍なく発表してもらうためには、まず全体を 4~6 人ほどのグループに分けて 1 グループずつ発表するという形式が考えられる。筆者も以前はこの形式を採用していた。しかし、これだと学期中に中間・期末の 2 回の発表がせいぜいで、それ以上の回数を行うことは、時間の都合上困難である。2 つ目は、個別指導できる機会の少なさである。2 回の発表のみでは、全員を個別に指導して、プレゼン技術の向上をはかることは容易ではない(中井編 2015:174)。

一方で、近年、ICT 活用教育の一環として、タブレット端末を利用した授業実践が増えている(岩居 2012, 大西 2012 など; 塚本 2012, 久我・立部 2015 も参照)。筆者も、プレゼンテーション授業の 2 つの問題を克服するアクティブラーニングの試みとして、iPad を活用した英語ポスタープレゼンテーション(以下、ポスタープレゼン)を行っている。本稿では、その実践報告を行う。

## 2. 授業概要と教室設備

### 2.1 授業デザイン

対象となるのは、2018 年 4~8 月開講の 1 年次生対象「実践英語」2 クラスと 2 年次生対象「専門英語基礎」1 クラスである。プレゼンを導入する目的として「自ら選んだテーマを批判的に読み解き、自ら考え調査し、英語で発信することができる」ことを目標に掲げ、授業初回時に受講者に説明した。プレゼンのテーマは、実践英語では指定教科書の内容に

関連したトピックを教員側で提示し受講者に選択してもらった。専門英語基礎では「自分の専門に関するトピック」という指定のみで、後の詳細はグループで議論して決めてもらった。学期中を通して同じトピックを扱うこととした。グループは 4 名を基本として学生主導で決定した。

ポスタープレゼンを行うにあたり、練習としてほぼ隔週で「ミニプレゼン」を課した。ミニプレゼンは 400 語以上の英文記事を自分で見つけ、要約と感想をまとめて事前に提出、教室でグループメンバーに英語で発表する活動である。課題提出には大阪大学の授業支援 Web システム「CLE (Collaboration and Learning Environment)」を使用した。発表時間は 5~10 分程度とし、プレゼンには説明のためのスライドの作成および持参が求められる。このミニプレゼンの成績は、成績評価全体の 40%を占める。

ミニプレゼンの発表時には iPad による動画撮影を行い、提出することを求めた。また、発表者以外に司会担当と撮影担当を毎回決めてもらい、発表の進行を学生自身にお願いした。司会者用の台詞(次頁図 1 参照)も用意した。<sup>1</sup> また、グループメンバー同士で発表評価を行うピア・レビューも行った。

このミニプレゼンを学期中 3 回程行い、プレゼンに慣れるための練習とした。この他に、発表時の定形表現や質疑応答のための表現を列挙したリストを配布し、定形表現を使った実践練習を行った。また、加えて、専門英語基礎の方では、Gesture, Posture, Eye Contact といった伝達上の振る舞いの練習や、発音・イントネーション・音連結などの音声的側面、質疑応答などに関する実践練習も集中的に行った。

以上のミニプレゼンの活動を練習とし、学期の中

<sup>1</sup> 岡田悠佑先生(大阪大学言語文化研究科)が Web 上に公開されている資料を参考にさせていただいた(<https://sites.google.com/site/liloarise2690/project-based-english-teaching-at-osaka-u?authser=0>)。

間または期末に本番の試験としてポスタープレゼンを行うこととした。

グループ内でのミニプレゼンと議論の進め方(例)  
準備: 発表の順番、司会者 (Chair) C=Chair, P=Presenter, Q=Questioner

1. C: Hello, my name is "NAME." (Cの名前を言う)
2. C: I'm the chair for today's session.
3. C: The first presenter is Number "iPad番号" Mr./Ms. "NAME."  
(最初の発表者のiPad番号(数字1~2桁)と名前を言う) We have 10 minutes for the presentation and questions. Now, Mr./Ms. "Name," would you give us a talk?
4. P1: Thank you for your introduction...  
(プレゼン開始。最後は "Thank you." などで締めくくる)
5. C: Thank you very much, Mr./Ms. "Name". It was an interesting presentation. So do you have any questions or comments?  
(Chairを含めてAudienceが質疑応答をする)
6. C: Now it's time to finish. Thank you Mr./Ms. "NAME" for your good presentation! Let's give him/her a big hand. (拍手)  
(3Cから繰返し・カメラ切り替え)
7. C: The next presenter is ...

図1 ミニプレゼン司会進行のセリフ

## 2.2 受講者について

受講者は、実践英語が大阪大学工学部 1 年生 43 名、基礎工学部 1 年生 48 名、専門英語基礎は人間科学部 2 年生 48 名であった。受講者の多くは、語彙や文法、読解力など基礎的な英語力は高かった。また専門英語基礎では、英語プレゼンの経験があり、授業活動にすぐに慣れた学生も多かった。

iPad の使用については、スマートフォンを所持して操作に慣れている学生がほとんどであり、授業でのタブレット端末の使用にはほとんど問題がなかった。一方、課題提出のためのパソコンの使用には問題が多かった。タイピングに慣れてない学生が多いこと、そして提出ページへのアクセス方法が複雑なことも相まって、授業 Web システム「CLE」への課題提出がうまくいかない学生が、授業開始当初多く見られた。対策として、提出方法を丁寧に説明するチュートリアルを 1 コマ分行って対応した。慣れてくると提出できないと訴える学生も減っていった。

## 2.3 教室設備

教室は、大阪大学全学 ICT 支援型協働学習教室 (Handai Active Learning Classroom、以下 HALC 教室) を使用した。HALC 教室は可動式の椅子、机、ホワイトボード、4 面プロジェクタ、Apple TV、貸

出用 iPad50~60 台が設置されている。<sup>2</sup> iPad は名簿の番号順に番号を割り当てて初回で周知し、以降同じ番号の iPad を使用するよう指定した。

iPad の出し入れと管理は TA (ティーチング・アシスタント) をお願いした。iPad 設備のある教室では、TA によるサポートが非常に重要である。

## 3. ポスタープレゼンのための iPad 機能とアプリ

次に、英語ポスタープレゼンを行う上で鍵となる iPad の機能およびアプリケーションを紹介する。

### 3.1 動画撮影と動画提出

まず、受講者には教室でのプレゼンの様子を iPad で撮影してもらい、動画を提出してもらった。発表の様子を動画に撮影することは、(i) 教員による個別評価のための記録となる、(ii) 発表者が自分の発表を客観的に振り返ることができる、(iii) 発表者と聴衆が (少なくとも撮影中は) 英語だけで話し真剣に発表に取り組む、といった利点がある。

撮影には、iPad に接続可能な IK Multimedia 社のマイク iRig Mic Lav を使用した。このマイクは、2 本を連結させて iPad に差し込む (カスケード接続) ことで、2 人の音声を同時に録音することができる。撮影時、iPad 本体のマイクだけでは他のグループの発表音声や雑音まで拾って録音してしまうおそれがある。接続マイクの使用によって、より明瞭な音声で動画を撮影できる。

また、タブレットスタンドを各グループに用意した。撮影担当者が iPad を手で持ってプレゼンを撮影し、発表や質疑応答に参加しにくいという状況を回避するためである撮影用 iPad をスタンドに立てて固定し、全員が発表に参加できるようにした。



図2 iPad マイクとタブレットスタンド

<sup>2</sup> <http://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/ictfored/forteachers/a212>

動画撮影と提出には、iPad のカメラアプリと動画共有サイト Youtube<sup>3</sup>を使用した。iPad のカメラアプリで撮影すると、一度録画ボタンを押せば撮影した動画が必ず残る。保存の失敗による撮影事故のおそれがない。また Youtube には、ある程度大きな容量の動画もアップロードできる利点がある。加えて、図 3 のようにパソコン上で動画を一覧で確認でき、タイトル等の動画情報の修正や教員によるフィードバックが容易にもなる。

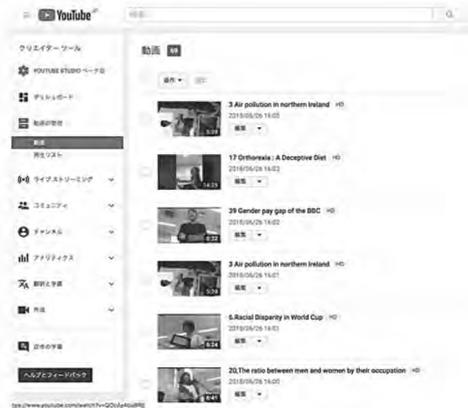


図3 Youtube での動画一覧

Youtube への動画提出には、手順を書いたマニュアルを配布した。動画は「限定公開」とし、動画の URL を知らないと閲覧できないようにした。提出には Google アカウントが必要となるが、教員側で授業用アカウントを作成し、それを授業時に公開した。パスワードは授業後に毎回変更し、共用 iPad にログイン情報が残ってもログインできないようにした。

### 3.2 Web フォームによるピア・レビュー

プレゼンの評価として、教員による評価以外に、受講者同士のピア・レビューも行った。評価の提出は、教員が事前に作成した「Google フォーム」で行うこととした。Google フォームとは、Google 社が提供する Web フォームで、アンケートなど質問フォームが無料で作成できる (図)。<sup>4</sup> 受講者が提出した評価の集計結果は、Google スプレッドシートという表計算アプリケーションに自動的に移し替えられ、Excel と同じように表データとして管理できる。

ミニプレゼンそしてポスタープレゼンの時には、聴衆が iPad を手にして、ブラウザで Google フォームを開きながら発表を聞き、評価をつけていく。



図 4 Google スプレッドシートによる評価シート

## 4. iPad を活用した英語ポスタープレゼン

### 4.1 概要

本節では、3 節で述べた iPad 機能を活用して行う英語ポスタープレゼンについて説明する。久我・立部 (2015) では、教育現場でのタブレット端末の活用方法として、次の 5 点を指摘している。

- (1) a. デジタル教科書ビューアー
- b. プレゼンテーション用ツール
- c. 学習者の共同学習ツール
- d. 辞書ツール
- e. マルチメディアへのアクセス媒体
- f. 学習用ソフトウェア利用の媒体

本稿で説明するポスタープレゼンは、(1)のうち(b)、(c)、(e)の活用方法に該当する。

授業ではまずミニプレゼン用の 4 人グループを 2 人組のペアに分け、2 週に分けて発表会を行った。ポスターは、A4 用紙 8 枚に印刷したスライドを組み合わせ A1 サイズポスターを作成し、各自印刷して当日持参するよう受講者に指示した。発表者には、①から⑩の番号を割り振っておき、指定の場所に配置した移動式ホワイトボードの両面にポスターを貼り付けてもらった (図 5 を参照)。

発表のルールは、次の通りに定めた。(i) 発表は 5 分～8 分程度にまとめ、30 分間聴衆が来る限り何度

<sup>3</sup> <https://www.youtube.com/>

<sup>4</sup> [https://www.google.com/intl/ja\\_jp/forms/about/](https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/)

でも発表する。(ii) 発表中は読み原稿の持ち込み禁止、日本語厳禁。(iii) 質疑応答を含めた発表の様子を iPad で動画に撮影する（撮影は聴衆に依頼する）。

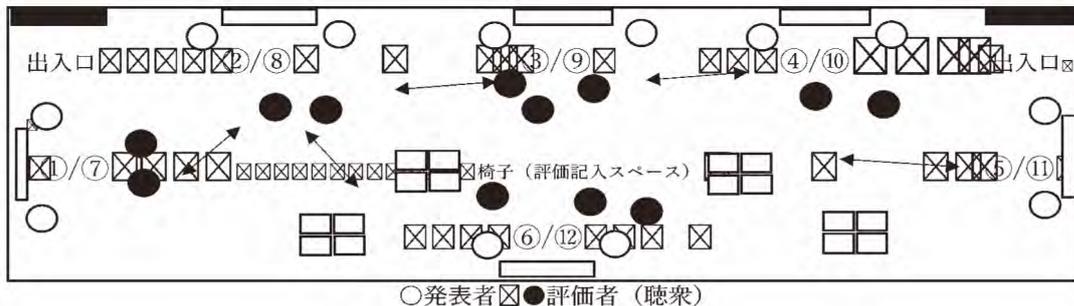


図 5 ポスタープレゼンの配置図

これらのルールがもつ狙いを述べる。まず、ルール (i) では、発表者が内容を短くシンプルにまとめ、発表自体をできるだけたくさん繰り返せるよう意図した。また、(ii) の原稿持ち込み禁止というルールは、事前に練った英文を音読・暗唱するよう促し、当日はポスターの情報と発言内容を統合させ、より自然に話すことを意識させるためである。(iii) iPad による動画撮影は、教員が時間内に全ての発表を回れなくても、動画によって後日評価やフィードバックができる。また、動画の URL をクラス内で公開すれば、受講者は他の発表を見て参考にできる。

一方、聴衆のルールは、次の通りである。(i) 評価者として教室内を移動してできるだけ多くの発表を聴き、質疑応答と評価を行う。(ii) 質問内容と評価は、Google フォームで作成した評価フォーマットに iPad で入力する。(iii) 評価した発表数および尋ねた質問数が多いほど評価者として高く評価され、発表全体の評価も高くなる。これらのルールにより、聴衆は iPad で Web 上の評価フォームに評価を打ち込みながら、できるだけ多くの発表を聞いて回ることが求められる。

## 4.2 発表時の学生の様子

ポスタープレゼン本番では、30 分という時間の中で、どのグループも 2~3 回程度発表を繰り返すことができた。発表内容がよくまとまっているグループであれば、発表を 4 回繰り返したところもあった。

一方で、次の聴衆が現れず、時間を待っているグループも見られた。教員の側から話しかけ、待ち時間も無駄にならないようにしたが、もっとポスターの配置を工夫して聴衆が移動しやすい環境を作るなど、何らかの対策が必要だと感じた。

1 年生の実践英語のクラスは、「読み原稿持ち込み禁止」というルールがもたらす発表への負荷に慣れておらず、準備が大変な様子であった。特に、英語が苦手な学生は、発言内容を思い出して口に出すことだけで精一杯で、Gesture や Eye Contact、Posture が疎かになる様子も見られた。また、次に話す内容を思い出せなくて沈黙が続く発表者もいた。受講者のプレゼンへの習熟度に応じて準備期間を調整する必要がある。

2 年生の専門英語基礎のクラスでは、英語でのプレゼンに慣れている学生も多く、かなりスムーズに発表を行っているグループが多かった。質疑応答についても、単純に質問に答える以上に、That's a nice question. や Thank you for asking. のような表現を使って適切なやりとりをしているグループが見受けられ、授業での実践練習の効果が現れた形となった。また、適切な Gesture、Eye Contact、Posture がしっかりと身に付いている様子が伺えた。

iPad での発表評価は、ほとんどの学生が手順を間違えず、スムーズに評価が入力できていた。紙媒体による評価と比べて、準備や回収、集計にかかる労力が大幅に減少できた。聴衆から集めた評価やコメントは、匿名の形で受講者に公開した。



図 6 iPad 支援型英語ポスタープレゼンの様子

一方動画撮影に関しては、特に2つ課題が残った。まず、ポスタープレゼンでは聴衆の移動に配慮して、撮影にマイクを使用しなかった。このため、撮影者が発表者から遠く、カメラで発表者の声を拾えておらず、後日提出動画を見ての評価に苦労することがあった。この問題には、発表者によく近づくなど、撮影方法を丁寧に説明して対応したが、撮影の仕方を発表会の前に十分練習しておくべきであった。

次の問題点として、時間配分を間違えて時間内に撮影を完了できないグループがいたことが挙げられる。受講者にはあらかじめ「動画が撮影できないと評価自体ができないため、プレゼン全体の評価点が大幅に下がる」と申し伝えたが、それでも撮影に失敗するグループが出た。このような撮影事故は、2週目に終了10分前を合図することでかなり改善した。また、発表者による動画とは別に、教員とTAが手分けして予備用の動画を撮影していたため、撮影に失敗したグループの発表評価も完了できた。

ちなみに、専門英語基礎では、学期中間にポスタープレゼンを行い、期末には従来のスライド投影型のプレゼンも行った。スライド投影型は1グループずつ全員の前で発表する形式であるが、一人あたり話す時間が3分程度しかない、聴衆とのインタラクションがしにくい、聴衆からの質問も一部の積極的な学生のみが発言するなどの課題が見られた。中井(編)(2015:174)が指摘している通り、ポスタープレゼンに比べると受講者のより受動的な学習姿勢が見受けられる。スライド投影型のプレゼンで発表回数増加や受講者の積極的参加を促すことはかなり難しいと言える。

## 5. 学生の声

以上紹介したiPadを活用した英語ポスタープレゼンの試みによって、受講者個人の発表の機会が格段に増えた。学期中およそ5回は英語で発表を行っている計算となる。それに付随してプレゼン技術やプレゼンに対する受講者の姿勢そのものも大きく向上する様子が見られた。特に、英語を話すことに慣れていない1年生にとって、実践的なSpeakingの機会に満足している様子が伺えた。実際、このことは学期終了後に実施したアンケートの記述からも伺える。一部をご紹介します。

- ・ 短期間にたくさんのプレゼンを行うことで、英語で話す時にあまり気構えなくなった。(基礎工学部1年)
- ・ 隔週でプレゼンをしなければいけない、というのがとても良かったです。授業内で役に立つ表現なども知れ、実践までできたのが良かったです。(人間科学部2年)
- ・ グループでのミニ発表は英語力も伸びるし適度な緊張感で良かった!!(人間科学部2年)
- ・ 英語をいっぱい話せる、本当に実践的な授業。(工学部1年)
- ・ iPadを使ったのが効率良いし、面白いと思いました。(工学部1年)

## 6. まとめ

本稿では、iPadとそのアプリを活用した英語ポスタープレゼン授業の実践報告を行った。40~50人規模のクラスで英語プレゼン授業を行う際の問題は、ここで紹介した方法でiPadの活用することでかなり克服できると考えられる。また、発表の評価およびフィードバックについても、紹介した動画撮影・動画提出方法で受講者のパフォーマンスを記録し、従来よりも容易に実行できることが分かった。

今後の課題としてこれまでに述べた項目以外に、教員から受講者への個別のフィードバックをさらに充実させること、そしてそれによって受講者の英語運用能力がどの程度向上できたかを客観的に評価す

るデータを収集することの2点が挙げられる。

授業にタブレットを導入する際、従来パソコンでできていたことをiPadに置き換えただけといった、デバイスの置き換えにとどまらない教育的成果を達成することが必要だと言われる(岩居2012など)。iPadのような新しいデバイスを教育に導入する際には、こうした従来できなかった授業実践を新たに創り出すことが肝要である。今回の授業内容はその試みの1つとして位置づけられる。今後もさらに改善させていきたい。

## 謝辞

本稿で紹介した授業を実践するにあたり、大阪大学サイバーメディアセンター岩居弘樹先生と岩居先生主催のiPad Caféにご参加の先生方から多くの有益なアドバイスをいただきました。また、言語文化研究科言語文化専攻の岡田悠佑先生が展開されているプロジェクト型発信授業を大いに参考にさせていただきました。ここに記して感謝申し上げます。最後に、サイバーメディアセンターの関係者の方および全学教育推進機構教育学習支援部(TLSC)関係者の皆様には日頃の授業実践で多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 岩居弘樹(2012)「iPadを活用したドイツ語アクティブラーニング」『大阪大学教育実践センター紀要』8, pp. 1-8, 大阪大学.
- 大西久雄(2012)「iPadを活用し英語科の授業に協働教育を」TEACHING ENGLISH NOW 23, pp. 10-11.
- 久我瞳・立部文崇(2015)「タブレット端末の特性を効果的に活かした言語学習」『徳山大学論叢』80, pp. 57-78, 徳山大学.
- 中井俊樹(編)(2015)『シリーズ大学の教授法3 アクティブラーニング』, 玉川大学出版部.
- 塚本宏雄(2012)「授業におけるタブレット型端末の活用可能性に関する一考察」『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』22, pp.247-255, 鹿児島大学.